

佐渡島の町家に関する史的 research

主査 大場 修^{*1}委員 檜垣 友映^{*2}, 宮下 浩^{*3}

本論は佐渡島の町家建築について、遺構調査に基づき農家住宅との関係も含めてその歴史性を検討した。その結果、島内の町家は三類型に大別でき、地名を冠して「両津型」「赤泊型」「相川上町型」と仮称した。両津型は農家由来の在来型町家であるのに対し、赤泊型と相川上町型は外来型町家だと指摘した。外来二類型は出所を異にし、赤泊型は対岸の中越・下越方面から到来した町家形式であるのに対し、相川上町型は近世初頭、鉱山町の形成に伴い持ち込まれた建築文化の伝搬の所産であり、京都起源の町家形式（京都型町家）との関係が想定しうると推論した。本論は佐渡島の町家を通して、日本の町家建築が持つ地域性と普遍性を浮き彫りにした。

キーワード：1) 佐渡島， 2) 町家， 3) 京都型町家， 4) 外来型町家， 5) 在来型町家，
6) 家屋台帳， 7) 越後， 8) 鉱山町， 9) ナンド， 10) オエ

A HISTORICAL STUDY OF TOWNHOUSES ON THE SADO ISLAND

Ch. Oba Osamu,

Mem. Higaki Tomoe, and Miyashita Hiroshi,

The purpose of this study, we examined the characteristics of the townhouses in Sado Island. As a result, the town houses of this island have been divided into three types. I pointed out that one originated as farmhouse and developed into rural-style town house, the other two styles came from outside of the island. I reasoned that two foreign types differ in a source and one came from the Echigo district on the other side of the sea, another style was the form carried in with formation of a mining town at the beginning of Edo period. This paper showed the regionality and universality which the town house of Japan has.

1. はじめに

佐渡島は、西日本からの文化も交わる独自の地域文化を形成している。地元史誌はこの点を強調し、「佐渡は日本の縮図である」という¹⁾。この指摘は、町家についても当てはまるように思えてならない。佐渡では町家形式が多様であるし、新潟県本土で卓越する妻入町家（写真1-1）が佐渡では少数派で、平入町家が優勢である（写真1-2），という事実からして、新潟本土とは異なる佐渡町家独自の建築文化と歴史性を感じさせる。

とりわけ佐渡市相川地区は、佐渡島内の町家と町並みの歴史性とその特質が凝縮されているように感じられる。相川地区は、相川金銀山の鉱山町として近世初頭に

成立し、段丘上に形成された上町（以下、相川上町）と、海岸沿いに広がる下町（以下、相川下町）がそれぞれに発展した。現在でも歴史的建造物の残存率が高く²⁾、古い町並みがよく残る地区と評価され³⁾、佐渡の町並みを検討する上で重要地域と目されている。

特に、佐渡奉行所から金銀山に至る上町地区は、平屋建てを主体とする階高の低い町家が並び、島内の他地区と異なる景観を残して注目される（写真1-2参照）。

また、赤泊地区は島内において妻入町家を有する数少ない町並として注目され、相川地区などとはまた異なる歴史性と町家の系譜を思わせる。

佐渡島内における既往の町家調査としては、西村らによる建築計画・空間論的な調査研究があるが⁴⁾、建築史からの調査は早期に重要伝統的建造物群保存地区に選定された宿根木地区⁵⁾を除けば手薄であった。

相川地区については、文政9年（1826）の「相川町町墨引」に基づく当時の都市構成を検討したもの⁶⁾、伝統的建造物群保存地区対策調査があるが（1993年度）⁷⁾、後者は町家についてはサンプル調査に留まっている。



写真1-1 新潟市白根地区の町並み



写真1-2 佐渡市相川上町地区の町並み

*1 京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授

*2 京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程

*3 京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程

赤泊地区については建築史的なアプローチは管見ながら見当たらない。

そんな状況下で、2010 年度、大場らは相川上町、および両津湊地区の町家調査を独自に行い、両地区を比較した⁸⁾。その成果が本研究の発端となった。

本論は、相川上町と両津湊地区を起点に、島内の町家遺構を可能な限り調査し、各地区の歴史性を踏まえつつ、農家住宅との関係も踏まえ系統的に検討する事で、佐渡の町家とは何なのか、その実相を明らかにする。

その知見は、広く日本における町家建築を再考する重要な契機となるであろう。佐渡島という小さな窓から、日本の町家が見渡せるような感触を筆者らにはある。

今なぜ佐渡の町家なのか、単に未調査地であるからではない。佐渡を通して日本の町家のローカリティー（地域性）とユニバーサリティー（普遍性）の関係が浮き彫りになると考えるからである。

2. 研究方法

本研究は先行調査の成果を前提に、相川下町を始め相川周辺地区、赤泊地区等における伝統家屋の建築構成とその特徴を実測復原調査によって把握した⁹⁾。

具体的には、相川下町に 13 例の町家を新規に復原調査し、相川周辺地区で 12 例の伝統家屋の復原調査を実施した。赤泊地区では 8 例の町家を調査し、同時にその関連調査として小木地区、さらには日本海を挟み赤泊の対岸に位置する新潟県本土の寺泊や出雲崎地区などで数件の家屋を調査した（図 2-1/ 表 2-1）。

3. 相川地区の町家形式の概要

3.1 家屋配置

相川地区の伝統的家屋は、上町と下町両地区ともに土間を裏手まで通し、土間に沿って居室を並べる町家型の建築である（図 3-1）。主屋裏手には水廻りを張り出させ、中庭を介して裏手に納屋や離れが配置される。

納屋は「サヤ（鞘）、サヤ堂」と呼ばれて内部に土蔵を据えるものも多い（図 3-2）。家屋によってはサヤ堂

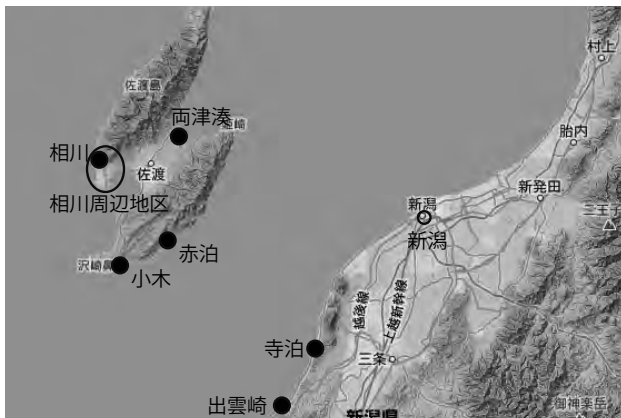


図 2-1 調査地区位置図

に 2 棟の土蔵を据えたものもある（図 3-1 参照 / 写真 3-1）。

3.2 平面形式

主屋の 1 階平面は、通り土間に沿って表からミセ、オエ・(ナンド)、(ブツマ)、ザシキが並ぶ。オエとは町家のみならず、農家あるいは漁家、宿根木の家屋にも同様に設けられる部屋で、家の中心を占め、古くは囲炉裏を据えたためか上部は広い吹抜けとするのが一般的である。天井を張る場合も高く吊られ、オエ上部に二階はない。階段もオエに設置されることが多い。オエは動線の結節点であり、オエを中心に間取りは構成されている。この点は、後述する農家や漁家においても同様である。

以上の説明は、相川の上町と下町いずれの町家にも共通する。しかし、相川の町家においてナンドの存在形態は一様ではない。ナンドを持つ場合は、間取りの中心を占めるオエの上手（土間から見てオエの奥）にナンドが配置されることが通例であるが（図 3-3/ 写真 3-2）、その位置にナンドを持たない家屋もある（図 3-4）。

ナンドの有無を廻る平面構成の違い、あるいはその地域差は、相川地区の町家の歴史性を考える上で重要な視

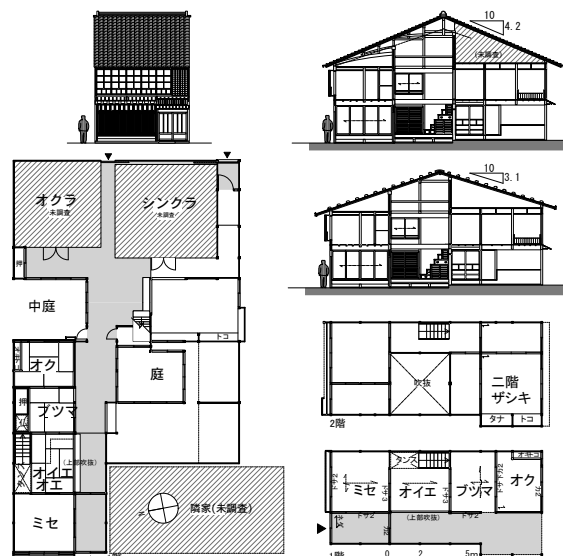


図 3-1 S 家住宅（三町目）左上：現状立面図、左下：現状平面配置図、右上：現状断面図、右中：復原断面図、右下：復原平面図

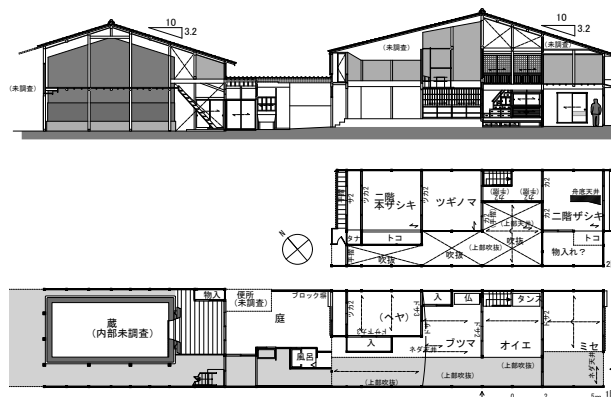


図 3-2 H 家住宅（下戸町）上：現状断面図、下：復原平面図

表2-1 調査家屋一覧表

客屋名	主屋										屋根										オエ										蔵の有無
	建築年代	建築年代の根拠	妻入/平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対する位置	現状の屋根葺き材	現状の屋根葺き材の葺き方	屋根葺き材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺き材	当初の屋根葺き材の葺き方	屋根葺き材の変更の年代	年代の根拠	天井高(天井裏)	天井意匠	広さ/当初	トオリニワ上部の明かりとり窓	見下ろす窓の有無	廊下の有無	座敷の間の有無	座敷の間の有無					
雨澤池地区	Ki家	18世紀後期?	部材	平	1	2,930	5,142	2.75間半	7間	—	上手	瓦	3.3	〇	×	板葺石置き	3.3	不明	—	3,335	神縁	10	〇	×	—	—	×	×	〇	×	
	K店	江戸中期	霊薄から推定	平	1	3,058	5,013	3間半	6間	—	上手	瓦	3.1	〇	×	板葺石置き	3.1	不明	—	3,553	神縁	8	×	×	—	—	×	×	〇	×	
	Tk家	K家に続く遺構	部材	平	2	3,763	5,456	4間半	7間半	表	上手	トタン	3.1	〇	×	板葺石置き	3.1	不明	—	2,653	神縁	7.5	×	×	×	×	×	×	〇	×	
	O家	文化6年(1809年)	普請文書「黒ふしん帳」	平	2	4,296	5,874	3.25間半	8間半	表	上手	瓦	3.0	〇	×	板葺石置き	3.0	不明	—	3,070	合板	7.5	〇	×	×	×	×	×	〇	×	
	I家	19世紀前半	O家から比定	平	2	4,590	6,363	3間	8間半	表	上手	瓦	3.0	〇	×	板葺石置き	3.0	不明	—	3,994	神縁	7.5	〇	×	×	〇(後補)	×	×	×	〇	〇
	SC	幕末から明治初期	部材, 家屋構成	平	2	3,956	6,492	4間	9間	表	上手	瓦	3.7	不明	不明	—	—	—	—	4,029	神縁	10	〇	〇	〇	×	×	×	〇	〇	
	Ts家	明治中後期	明治21年地籍図, N家から比定	平	2	4,343	7,288	4間	8間	表	上手	瓦	4.0	×	×	—	—	—	—	4,221	神縁	6	〇	〇	〇	〇	×	×	〇	〇	
Y家	明治末期～大正期	間取り	平	2	4,401	6,317	3間	9間	表	上手	瓦	3.6	〇	〇	板葺石置き	不明	不明	—	3,911±2	無し	7.5	〇	×	×	〇	×	×	〇	〇		
N家	明治最末～大正期	推定	平	2	4,892	7,881	5間半	8間	表	上手	瓦	4.7	×	×	—	—	—	—	4,601	神縁	10	〇	×	〇	〇	〇	×	〇	〇	〇	
相川上流地区	I家	19世紀前期	部材	平	1	2,988	5,274	3間	6間	—	×	セメント瓦	3.9	〇	〇	板葺石置き	不明	明治20年～昭和4年	台帳	3,030	神縁	4.5	×	×	—	—	×	×	〇	×	
	Su家	19世紀前期～中期	平面構成	平	2(後補)	4,862	6,243	3間	6間半	裏(後補)	×	セメント瓦	2.9	〇	×	板葺石置き	2.9	昭和4年以後	台帳	2,271	樫太	4.5	×	×	×	×	×	×	×	不明	×
	Sa家	19世紀中期	推察	平	1	2,984	4,316	4間半	4間半	—	×	セメント瓦	2.9	〇	×	板葺石置き	2.9	明治20年～昭和4年	台帳	2,775	神縁	4.5	×	×	—	—	×	×	〇	×	
	Se家	19世紀中期	推察	平	1	不明	不明	2間	5間半	—	×	トタン	2.9	〇	×	板葺石置き	2.9	明治20年～昭和4年	台帳	未調査	—	—	—	—	—	×	×	〇	×		
	To家	元治元年(1864年)	棟札	平	2	約3500	約6000	3間	6間	裏	×	セメント瓦	3.8	〇	不明	板葺石置き	不明	明治20年～昭和4年	台帳	未調査2.9m程	合板	4.5	×	×	×	×	×	×	〇	×	
	S家	幕末～明治初期	部材	平	2(後補)	4,492	5,510	3間半	5間半	×	×	セメント瓦	2.8	〇	×	板葺石置き	不明	昭和4年以後	台帳	2.5m程・2.005	神縁・樫太	3.5/6	×	×	×	×	×	〇	×		
	Ta家	19世紀中後期	家屋形式(To家から比定)	平	2	4,004	6,092	4間弱	6間半	裏	×	トタン	3.2	不明	不明	—	—	—	—	2,183	神縁	6	×	×	×	×	×	〇	×		
	Ku家	明治前期	平面構成	平	1	3,443	4,626	3間半	5間	—	×	セメント瓦	2.5	〇	×	板葺石置き	2.5	昭和4年以前	台帳	未調査2.8m程	合板	6	×	×	—	—	×	×	〇	×	
	W家	明治中期	平面構成(Ku家から比定)	平	1	約3500	約4500	5間	4間半	—	×	セメント瓦	3.3	〇	〇	板葺石置き	未調査	昭和4年以前	台帳	未調査2.7m程	神縁	3	×	×	—	—	×	×	〇	×	
	K家	19世紀後期	家屋形式, 部材	平	1	2,527	4,565	4間半	5間半	—	×	セメント瓦	3.9	〇	〇	板葺石置き	3.2	昭和4年以前	台帳	未調査2.8m程	神縁	4.5	×	×	—	—	×	×	〇	×	
Te家	明治末～大正初期	家屋形式	平	2	4,994	6,859	5間	5間半	表	×	粘土瓦(黒)	4.1	不明	不明	—	—	—	—	2,963	神縁	8	×	〇	×	×	×	〇	×			
A家	不明	—	平	1	2,789	4,050	3間	5間半	—	×	セメント瓦	3.7	不明	不明	—	—	—	—	2,285	神縁	7.5	×	×	—	—	×	×	〇	×		
F家	昭和4年以前	台帳	平	1	3,593	6,137	4間	6間	—	×	セメント瓦(地瓦)	4.6	〇	〇	板葺石置き	3.5	昭和4年以前	台帳	未調査3m程	神縁	4.5	×	×	—	—	×	×	×	×	不明	×
相川下流地区	I家	文化14年以前(1817年)	過去帳, 部材	平	1	2,812	5,380	5間	7間半	—	上手	セメント瓦	4.1	〇	〇	板葺石置き	2.8	昭和4年以後	台帳	2,660	合板/不明	8	〇	×	—	—	×	×	〇	〇	
	S商店	天保9年(1839年)	棟札	平	2(後補)	4,834	7,432	4間	8間半	表(後補)	上手	粘土瓦(黒)	4.8	〇	〇	板葺石置き	2.9	昭和4年以前	台帳	4,200	神縁	8	×	〇	×	×	×	〇	×	〇	未調査(当初〇)
	So家	19C前中期	推察	平	2	4,572	5,765	4間	7間半	表	上手	粘土瓦(黒)	2.6	〇	〇	板葺石置き	2.6	昭和初期(昭和4年以後)	部材, 台帳	2,939	神縁	6(8)	×	〇	×	×	×	〇	〇	〇	〇
	T家	嘉永5年以前(1852年)	折棟札	平	1	3,071	4,797	3間	6間	—	×	セメント瓦	2.7	〇	×	板葺石置き	2.7	昭和15年	間取り	2,700	神縁	8+座敷部	〇	×	—	—	×	×	〇	×	
	O家	万延元年(1860年)	棟札	平	2(後補)	4,300	未調査	3間	7間	×	×	セメント瓦	未調査	〇	〇	板葺石置き	未調査	昭和4年以後	台帳	未調査2.1m程	合板	8/10	×	×	×	×	×	〇	×	〇	×
	H家	明治初～前期	部材	平	2	4,206	5,396	4間弱	5間半	表	上手	セメント瓦	3.2	〇	×	板葺石置き	3.2	昭和15年	間取り	1,951	樫太	6+座敷部/4.5	〇	〇	×	×	×	〇	×	〇	×
	K家	明治前期	推察	平	1	3,146	6,202	4間	7間	—	上手	粘土瓦(黒)	4.5	〇	〇	板葺石置き	3.2	昭和4年以前	台帳	2,861	神縁	7	〇	×	—	—	×	×	〇	〇	〇
	K会	明治前期	部材	平	2	4,512	6,578	5間半	5間半	表	上手	セメント瓦	3.1	〇	×	板葺石置き	3.1	昭和4年以後	台帳	3,800	神縁	8/6	〇	×	×	×	〇(後補)	×	×	〇	〇
	S瀬戸店	明治前期(24年以前)	地所建物遺産相続二付登記簿之証(下口)	平	2	4,595	7,090	4間	6間半	表	×	粘土瓦(黒)	4.3	〇	〇	板葺石置き	2.8	昭和4年以前	台帳	4,032	神縁	6/8	×	〇	〇	〇(後補)	×	×	〇	〇	〇
	S家	明治17年	棟札	平	2	4,634	7,389	3間	7間	裏	×	粘土瓦(黒)	4.2	〇	〇	板葺石置き	3.1	昭和4年以前	台帳	3,912	神縁	6	×	〇	〇	×	×	〇	〇	〇	〇
Wt家	大正元年	タンスの裏書	平	2	4,462	5,923	3間	5間	表	×	粘土瓦(黒)	2.9	〇	×	板葺石置き	2.9	昭和4年以後	台帳	4,050	神縁	4.5	×	×	×	×	×	〇	×	〇	〇	
Hy家	大正期前後	推察	平	2	4,384	6,692	3間強	9間	表	裏手	セメント瓦	3.1	〇	×	板葺石置き	3.1	昭和4年以前	台帳	4,267	神縁	7	〇	×	〇	×	×	×	〇	〇	〇	
N家	昭和15年	木造建物建築許可申請書	平	2	5,098	7,220	4間半	6間半	表	×	セメント瓦	4.5	×	×	—	—	—	—	3,160	神縁	4/12	×	×	×	×	×	〇	×	〇	〇	
相川扇形地区	I家	明治初期	部材	平	2	4,556	6,448	5間半	4間	裏	〇	粘土瓦	4.1	×	×	—	—	—	—	3,985+	—	10	—	—	×	×	×	×	×	×	
	Da家	明治前期	推察	平	2	未調査	未調査	7間	2軒半	—	〇	粘土瓦(黒)	未調査	不明	不明	—	—	—	—	2層吹抜4mほど	神縁	6	—	—	×	×	×	〇	×	〇	
	Iy家	明治前期	部材, 間取り	平	2	4,454	6,816	5間半	5間	—	〇	粘土瓦	5.0	不明	不明	—	—	—	—	2,129	樫太	8/10	—	—	×	×	×	×	〇	×	
	Ic家	明治中後期	推察	平	2	未調査	未調査	6間半	5間半	—	〇	粘土瓦(赤)	未調査	不明	不明	—	—	—	—	1.5層3mほど	神縁	8	—	—	×	×	×	〇	〇	〇	
	In家	大正5年	—	平	2	未調査	未調査	4間強	5間	裏	〇	セメント瓦	未調査	不明	不明	—	—	—	—	1層分(2層吹抜)不明	合板/不明	8	—	—	×	×	×	〇	〇	〇	
	Dh家	大正11年	折棟札, 特徴	平	2	未調査	未調査	5間強	4間半	—	〇	粘土瓦(黒)	未調査	不明	不明	—	—	—	—	2層吹抜	神縁	8	×	〇	〇	×	×	〇	〇	〇	〇
	M家	明治末期	部材, 建築様式	平	1	2,995	4,732	5間	5間	—	上手	セメント瓦	3.8	〇	〇	板葺石置き	3.0	昭和39年	間取り	2,370	合板/不明	8.5/10	×	×	—	—	×	×	〇	〇	〇
	N家	明治前期	部材, 形式(間取り)	平	1	未調査	未調査	7間弱	5間弱	—	〇	粘土瓦	未調査	〇	〇	板葺石置き	不明	不明	—	未調査3mほど	神縁	12.5	—	—	—	—	×	×	〇	〇	〇
	S家	大正3年大火後	間取(大火後)	平	1	3,711	4,938	6間半	4間半	—	〇	セメント瓦	3.3	不明	×	—	—	—	—	3,155	神縁	10	—	—	—	—	×	×	〇	〇	
	T家	明治初～前期	部材	平	2	4,863	6,190	4間	5間	表	上手	セメント瓦	3.7	不明	×	—	—	—	—	4,000	神縁	8	×	×	〇	×	×	〇	〇	〇	
G店	昭和16年大火後	間取(大火後)	平	2	未調査	未調査	約3間	8間	座敷か不明	上手	粘土瓦	未調査	×	×	—	—	—	—	未調査4mほど	神縁</											

3.3 構造形式

相川地区の町家の構造は、柱を基本的にみな通し柱とし、屋根垂木を支持する母屋まで立ち上らせるという形式で共通する。通し柱による構造形式を筆者は「通し柱型」と呼ぶが¹⁰⁾、この形式は主屋に限らず納屋等の付属屋にも用いられていて、相川地区においては普遍的な構造形式であると言えそうである。

しかも、両妻壁の柱間隔は1間、あるいは1間半を二つ割りにするピッチが標準的である。これは母屋の間隔とも連動し、柱配置が疎らで軽やかな印象を受ける。屋根は、前述の通り古くは板葺の石置き屋根が支配的であった。したがって、相川地区における町家の基本構造は板葺きの石置き屋根を持つ通し柱型、ということになる。

古写真などから、板葺きから瓦葺きへの普及過程が窺えるが、調査事例の中にも、実際に板葺き屋根を瓦葺へ葺き替えたものが多く認められた。単に板葺きの上に瓦を葺き直したものもあるが、屋根材を葺き替える際に、小屋組を改造し屋根勾配を変えたものも多い。

実際には、元の母屋上に添束をたて新たな母屋を渡し、瓦葺きに適した勾配の垂木を並べる屋根改造が一般的である(図3-3～3-7)。なかには屋根替えに伴い二階を増設する大掛かりな改造事例も認められる(後述)。

3.4 二階の居室形成

オエの上手、あるいはナンドの内部に階段(箱階段等)が設けられ、階段上部が二階の階段室となる。オエ上部は吹き抜けなので二階はなく、階段室の表側あるいは裏手に二階ザシキが設けられる。二階ザシキは表側に設けられることが多いが、この二階ザシキの成立過程は、相川下町の町家から概要が追える。

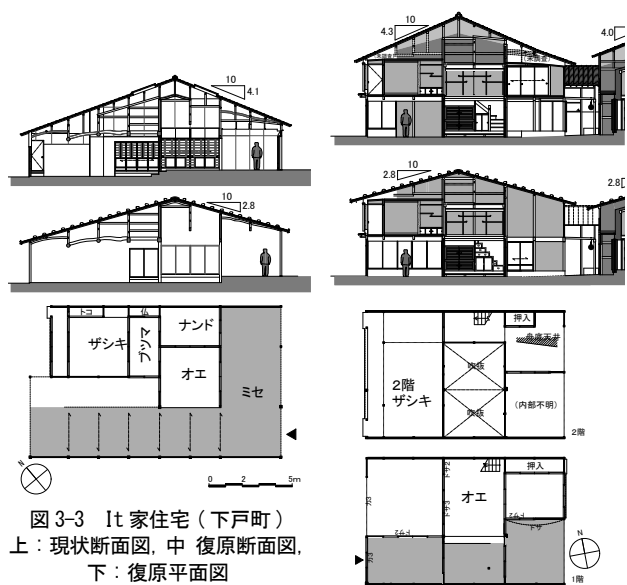


図3-3 It家住宅(下戸町)
上:現状断面図, 中:復原断面図,
下:復原平面図

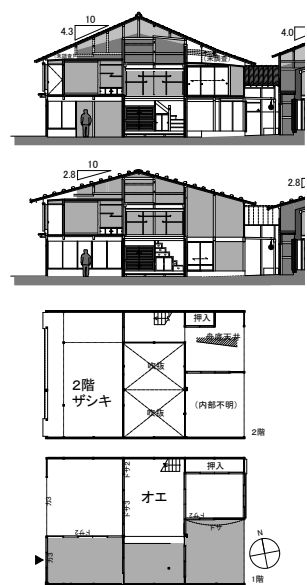


図3-4 S瀬戸物店(二町目)
上:現状断面図, 中:復原断面図,
下:復原平面図

相川下町の調査家屋を年代順に並べると、地区で最古級の町家であるIt家住宅(18C末～19C初, 下戸町, 図3-3参照)は平屋建てである(当初は板葺き石置き屋根)。天保9年(1839, 棟札)に建てられたS商店(下戸町)も、当初は板葺き石置き屋根の平屋建てに復原することができる(図3-5参照)。

ついで、嘉永5年(1852)以来の祈祷札¹¹⁾を残すT家住宅(小六町)も平屋建てである(図3-6)。同様に、万延元年(1860, 棟札)に建てられたO家住宅(大間町)は、軒切りにより表側の一部を失っているが、当初形式を復原すると二階の立ちは低く、二階に居室は認められない(表2-1参照)。

このように、相川下町における調査事例で、近世に遡るものに二階建ての町家形式は見いだせず、平屋建てが標準的な形式であったようだ。

年代は確認できなかったものの、部材の経年状況や家屋形式から、19C中～後期と推定されるH家住宅(小六町)では、二階の表側にザシキが設けられている点が注目された。しかし、軒高に十分な高さがなく、二階ザシキはいわゆる舟底天井となっているし、裏手は屋根裏のままという状況である。当家长宅は、二階建て町家へと移行する過渡的な形式を示す事例と見なせる(図3-7)。

一方、明治17年(1884, 棟札)のS家住宅(三町目)では、オエ上部の吹き抜けを除いて二階空間が発達し、

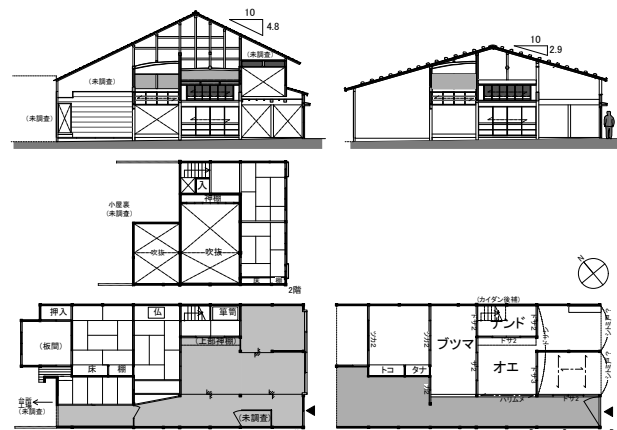


図3-5 S商店(下戸町) 左上:現状断面図, 左下:現状平面図,
右上:復原断面図, 右下:復原平面図

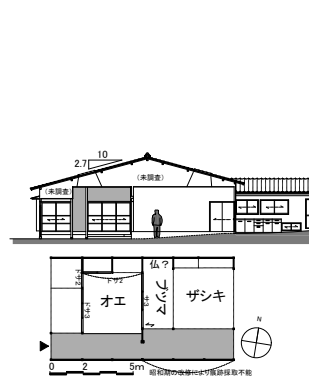


図3-6 T家住宅(小六町)

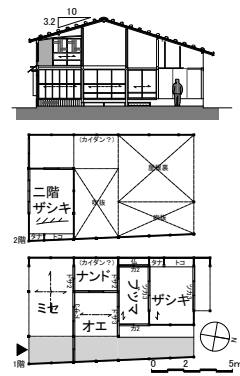


図3-7 H家住宅(小六町)

上:現状断面図, 下:復原平面図 上:復原断面図, 下:復原平面図

階高も十分に高い（図 3-1 参照）。この頃には二階建て町家が成立していたことを示す事例として当家は重要である。先に取り上げた S 瀬戸物店（二丁目、図 3-4 参照）も S 家住宅に前後する事例であることから、この時期二階建て町家が一気に普及したことを窺わせる。

また、前述の天保 9 年（棟札）築の S 商店（下戸町）は、時期不明ながら（少なくとも昭和 4 年以前¹²⁾）屋根を高めて板葺きから瓦葺きに葺き替え、表側に二階居室を設ける改造を行っている（図 3-5 参照）。

このような二階の居室形成は、相川上町においても凡そ同様の発展過程を想定することができる。

相川上町で年代が明らかな数少ない町家である To 家住宅¹³⁾（元治元年、1864、棟札、大工町、図 3-8）は、主屋裏手に小規模な二階ザシキを設けるが、表側の階高は依然低いままである（後述）。

一方、上町地区の明治後期に建てられた Tg 家住宅（上京町、図 3-9）は階高が表裏ともに高く、二階ザシキを備えた町家の事例である。上町においてこの種の二階建て町家は少ない。上町においては平屋建てを主体とする家並が今日まで踏襲され、上町における町家の二階建てへの指向は消極的である。

二階建て町家の成立時期が遅く、しかも、平屋建て町家も建てられ続けた、という相川地区、とりわけ相川上町における町家の建築動向は、結果的に、今日見る平屋建てが多く残り、中二階建て、二階建てが混じる変化に富んだ家並を創出させた。

これに対して、両津地区では二階建て町家の成立時期が早い。O 家住宅は、同地区における二階建て町家の標準事例であるが、文化 6 年（1809、普請帳）に建てられた町家で、今のところ島内で年代のわかる最古の町家である。O 家住宅は、両津地区においてこの時期すでに十分な階高を持った二階建て町家が成立していたことの証左として重要である（図 3-10/ 写真 3-3）。

それゆえであろうか、同地区では二階建ての町家が優勢で軒を連ね、統一感のある家並を形成している。

4. 相川地区の町家におけるナンド

筆者はすでに相川上町の町家調査（2010 年度）の結果から、同地区の町家ではオエの上手（土間の反対側）にナンドがなく、他のどこにもナンドに相当する部屋が見当たらないことを、両津地区の町家（図 3-10 参照）と比較しつつ明らかにしている¹⁴⁾。その状況は上町地区の町家の復原平面図を一覧すれば了解される（図 4-1）。しかしながら、その時点では事実関係の指摘に留まり、その意味や歴史的意義にまで関心が及ばず、十分な検討には至らなかった。

本節では、そのことの意味を改めて考えたい。

相川上町の調査家屋中で最も古いと考えられる I 家

住宅（推定 19 世紀前期、大工町）が、ナンドを持たない平面形式の典型かつ標準事例であろう（図 4-2/ 写真 4-1）。間口 3 間、奥行 6 間の平屋建の I 家住宅は、幅 1 間の通り土間に沿い 4 室の居室を 1 列に並べている。

この単純な平面構成は、オエの上手に屋根裏へ昇るための階段を組み込んだ押入を設け、他の居室の上手は壁とする。居室裏手の部屋には棹縁天井が張られるのみで、床の間等の座敷飾りがなく座敷として未発達である点は古式である。その手前の部屋は天井が吹き抜けで、オエに続く部屋（仏間か）と見られる。このように当家住宅は、座敷が出来る前段階の事例として注目されるのである。

I 家住宅に次ぐ Su 家住宅（19 世紀中期、当初平屋建て、中京町）における居室列最奥部の部屋は他室よりやや広く、当初より棹縁天井を張り、吊り床を設えて、簡素ながら座敷としての造作を認めることができる。さらに 19 世紀中期あるいは後期に下ると目されるものの平屋建てを保持する Sa 家住宅（大工町）や Ku 家住宅（米屋町）、W 家住宅（中京町）においては、居室列の最奥部の部屋に床の間と違い棚を設えたザシキが成立している（以上、図 4-1/ 表 2-1 参照）。

このように相川上町の町家を年代順に通覧した結果、そもそもオエの上手に小室（ナンド）を設ける平面構成は 1 例も確認できないし、当地区で最古級の I 家住宅から二階建ての町家である Tg 家住宅（19 世紀末期、図



図 3-8 To 家住宅（大工町）
上：現状断面図，下：現状平面図

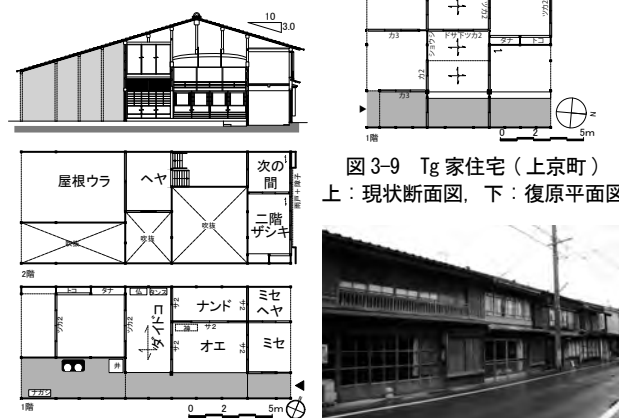


図 3-9 Tg 家住宅（上京町）
上：現状断面図，下：復原平面図

図 3-10 O 家住宅（両津湊）
上：現状断面図，下：復原平面図



写真 3-3 両津湊地区の町並みと O 家住宅（左手前）

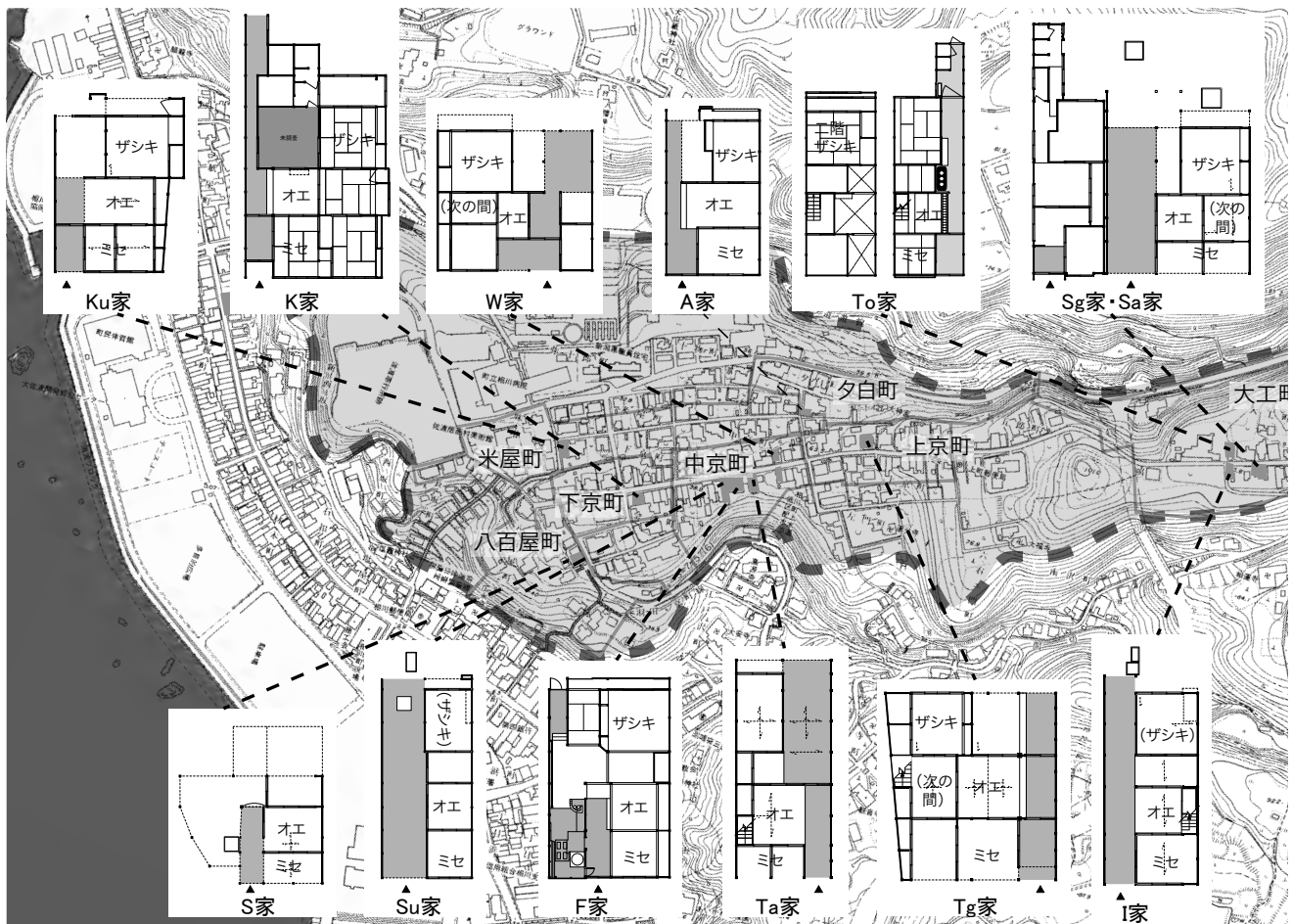


図 4-1 相川上町における町家平面形式分布図

3-10 参照)に至るまで、ナンドに相当する部屋を居室内のどこにも認めることはできない。年代が下がるに従い、居室列最奥部の部屋が座敷として整えられ、その状況は、二階建ての町家においても (Tg 家住宅のように主座敷が二階へ移動するものの)、変わらない。

一方、相川下町においてはナンドを持つタイプと持たないタイプが併存する (図 4-3)。前述の通り下町地区で最古と目される It 家住宅 (18 世紀末～19 世紀初期、図 3-3 参照) は、平屋建てで間口 5 間の中規模な町家であるが、オエの上手に 6 畳大のナンドが明確に区切られている。天保 9 年 (1839, 棟札) に建てられた S 商店も、当初は平屋建てに復される町家であることは先に指摘した通りであるが、It 家住宅と同様にオエの上手に 4 畳大のナンドが区切られている (図 3-5 参照)。

これに対して、相川下町における嘉永 5 年 (1852) の祈禱札を有する T 家住宅 (小六町、図 3-6 参照)、あるいは万延元年 (1860, 棟札) の 0 家住宅 (大間町) は、オエの上手にナンドは区画されず、当初から単純なる 1 列型の間取りを持つ (表 2-1 参照)。

相川下町の町家は、明治期に入ると、K 家住宅 (明治前期、紙屋町) のように、平屋建てではあるものの座敷飾りが出さうなもの (図 4-4/ 写真 4-2)、S 家住宅 (明治 17 年、1884, 棟札、三町目) のように二階が顕著に

発達し、二階ザシキを備えるものと (図 3-1 参照 / 写真 4-3)、2 パターンの発展方向が確認できる。この 2 例は、前者がナンドを有する近代町家の平面構成の典型例であり、後者は下町においてナンドを欠いた平面形を引き継ぐ、近代における町家の代表事例といえる。

以上のように、相川下町ではナンドを持つ町家と持たない町家が近世から近代にわたって併存し、両者には年代的な前後関係も、また地理的な立地特性も認められない (図 4-3 参照)。

ナンドを持たない平面形式は上町地区の町家と、構造形式を含めて同種である。一方、ナンドを持つ町家におけるナンドの存在形態は、オエの上手、すなわちオエの背後にそれが配置されるという点で、先行調査した両津地区における町家形式と類似する。

しかし、この点は単に両津地区の町家との類似に留まらない問題ととらえるべきで、両津地区を始めとしてよ

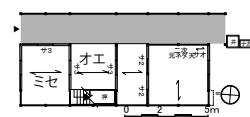


図 4-2 I 家住宅 (大工町) 復原平面図



写真 4-1 I 家住宅のオエ内観

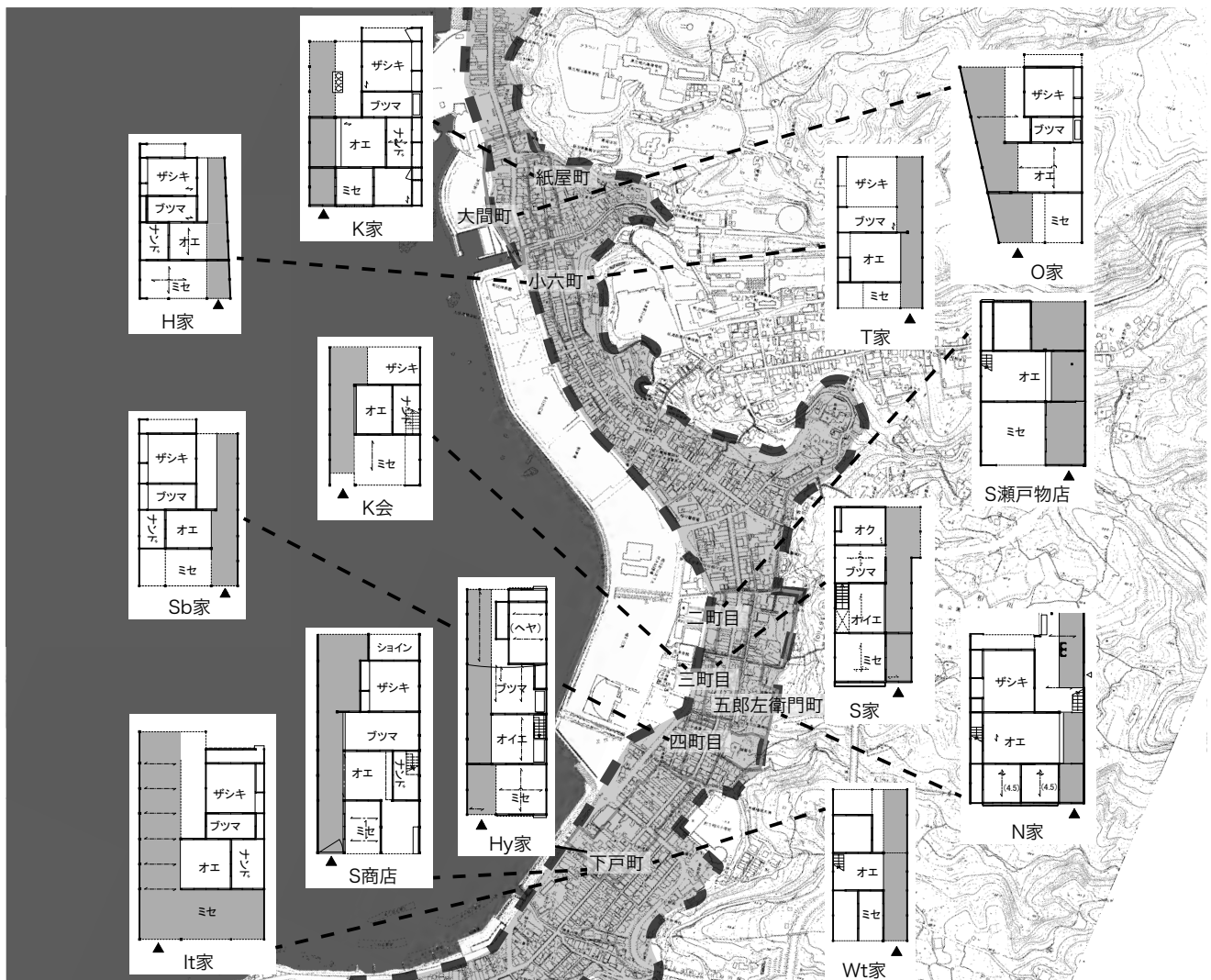


図 4-3 相川下町における町家平面形式分布図

り広く他地区との比較検討を行う中で、相川地区の町家形式を相対化し、その歴史的意味を探る必要がある。

5. 相川地区周辺の家屋形式

相川下町の町続きに位置する鹿伏地区は、海岸沿いに立地し畑作と漁業を主とする集落である。鹿伏地区における伝統家屋の平面形式は、同地区のN家住宅（明治前

期）の復原平面図に見る通り元板葺きの純然たる農家型である（図 5-1/ 写真 5-1）。

さらに同地区からほど近い高瀬地区も海岸部に立地する半農半漁の集落であるが、この地区の家屋も、S家住宅（大正期）が示す通り板葺きの農家型住宅である（図 5-2/ 写真 5-2）。

佐渡島における農家住宅は、重文指定されている北条家住宅（18世紀後半、佐渡市泉乙）に代表される（図 5-3/ 写真 5-3）。茅葺きで広間型を基調とする平面は、広間にあたるオイエを中心に、裏手にナンドを設け、上手に座敷列を配する。座敷上手の4畳間はショインとも呼ばれ、佐渡の民家に特徴的な部屋である（後述）。

相川近郊の鹿伏地区や高瀬地区の民家は、屋根は板葺きに復されるものの、その平面構成が農家型だと見なすのは、北条家住宅とその平面が同類だからである。

高瀬地区からさらに南に下ると稲鯨地区がある。

稲鯨は純然たる漁村集落として知られ、同地区は小規模な家屋が密集し漁村らしい景観をよく留めている。地区のなかで比較的規模が大きいI家住宅は、明治中後期に建てられた家屋で、広く大きく吹き抜けたオマエの中

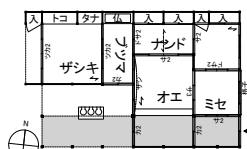


図 4-4 K家住宅（紙屋町）復原平面図



写真 4-2 K家住宅のオエ内観



写真 4-3 S家住宅（三町目）のオエ内観

心に、その裏手にナンド、オマエの下手に板敷きのダイドコ、上手に座敷列を設けて、その間取りは農家住宅に類する平面を構成している（図5-4）。

一方、稲鯨地区のIt家住宅も部材の調子や経年の度合いから明治期に溯ると推察される家屋である。その規模は、間口2間半、奥行4間半と、稲鯨地区における調査家屋中もっとも小型で、おそらく佐渡島内の伝統民家の中でも最小規模の家屋であろう（図5-5/写真5-4）。

It家住宅は、小規模な間取りゆえに踏込み土間式で竈が設けられ、土間に面するオエの一部とともにその上部が吹き抜けとなる。オエの一角には階段を据え、オエ裏手にはダイドコとナンドが配置される。二階は、吹き抜け以外をザシキとその前室（階段室）で構成する。

大正5年に建てられたというIm家住宅も間口3間強、奥行4間半とIt家住宅に次いで小規模である。その復原平面の構成は前土間式であることをはじめ、一・二階ともにIt家住宅とよく類似する（図5-6）。

稲鯨地区で見いだされる小規模で、通常の町家型あるいは農家型平面と比較すれば変則的とも見える平面形式は、集落の極端な高密度居住に起因するものと考えられる。集落の成り立ちは異なるものの、島内の宿根木集落（重伝建地区）の伝統住居とは、その小規模性と圧縮型の平面構成という点で共通性を感じさせる。

とはいえ、稲鯨地区において、規模に余裕がある家屋は農家型であり、ゆえに小規模家屋の平面構成の特異性

は、今回取り上げた調査事例をはじめとして農家型平面を基調とした変形型と見ることが出来そうである。

稲鯨地区から真野湾沿いに入ると、かつて廻船業で栄え漁業を主体とする沿岸集落である二見元村地区、さらには鶴子銀山の銀鉱石積出港として発展し主要道沿いに町場を形成している沢根地区がある。両地区では、通り土間をもつ町家型の家屋が採取された。

本論では、沢根地区のS屋を取り上げておく（図5-7/写真5-5/6）。沢根地区の炭屋町一帯は昭和15年の大火で被災し以後に復興した。S屋も大火直後に再建された町家で、間口4間、奥行8間の当地区では標準的な瓦葺き二階建て町家で、ミセの裏手にオエとナンドを配し、さらにツギノマ、ザシキがつづく。二階は、表側のミセ上部に二階ザシキとツギノマを設けている。二階へ昇る階段はダイドコロの土間境に設置されていて、しかもオエの吹き抜け上部には渡り廊下が廻らされている。

このようなS屋のオエにおける階段と渡り廊下を伴う様相は、本論がこれまで取り上げてきた町家とは異なるオエ廻りの構成であるが、他地区においても類例が少な

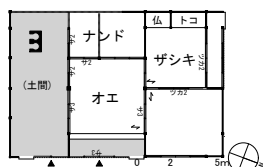


図5-1 N家住宅（鹿伏）
復原平面図



図5-2 S家住宅（高瀬）
上：現状断面図，下：復原平面図

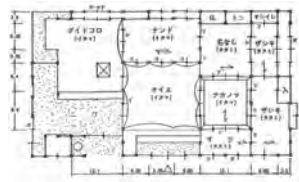


図5-3 北条家住宅
(18世紀後半，重文，泉乙)
現状平面図



写真5-1 N家住宅のオエ内観



写真5-2 S家住宅外観



写真5-3 北条家住宅外観

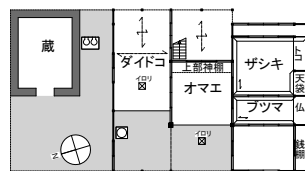


図5-4 I家住宅（稲鯨）
復原平面図

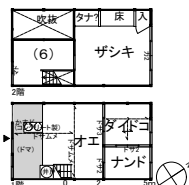


図5-5 It家住宅（稲鯨）
復原平面図

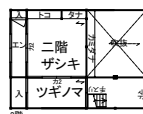


図5-6 Im家住宅（稲鯨）
復原平面図

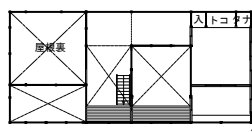


図5-7 S屋（沢根）復原平面図



写真5-4 It家住宅外観



写真5-5 S屋外観



写真5-6 S屋のオエ内観

くない（後述）。

以上、相川地区周辺集落の伝統住宅を事例的に採取し、平面形式を中心に復元的に検討を加えた。二見元村地区、沢根地区では町家型の平面が見いだされ、他地区ではいずれも農家型を基本とする平面形式が確認できた。

6. 両津地区の町家形式

両津地区は、両津湾と加茂湖を分ける礫洲上の夷と湊の2地区の漁村集落を母体とし、近世には佐渡の生産物の積み出し港や北前船など大型船舶の入港地としても発展した。夷地区は1945年に大火を被ったが、湊地区は被災を逃れたことで、短冊形の地割りとともに近世近代の町家が今日も多く揃っている¹⁵⁾。

両津湊地区の町家は、相川下町における町家と同類の平面を構成することから、相川地区の町家を相対化する上で好個の題材であると考えられる。

両津湊地区では、部材の経年状況やその形式から18世紀後期に溯りうる平屋建てのKi家住宅を最古とし、先述した文化6年（1809、普請帳）のO家住宅を経て、大正初期の大型町家であるN家住宅にいたるまで、9例の町家について復元的に詳しく検討した（表2-1参照）。これら9例は年代に係らずに一貫してナンドを持つプランタイプで共通する（図6-1）。

ナンドの状況は間口幅によりその奥行が異なる。最古級のKi家住宅では間口が3間に満たない為にナンドの奥行は1間もない。逆に間口6間に及ぶ最大規模の二階建て町家であるN家住宅では、押入を持つ7畳半もの広いナンドが確保されている。

このように家屋規模にかかわらず、言い換えればKi家住宅のように狭小な間口幅の町家でさえも、オエとナンドの関係、さらに他諸室との関係には定型とも呼ぶべき平面の一貫した型が存在する。

この平面の型は両津地区をはじめ相川下町、二見元村

地区、沢根地区などに広く分布しているが、両津地区では年代の判明する最古のO家住宅をはじめ、それよりも古い遺構も残すことから、この平面構成を以後「両津型」と仮称する。

両津地区の町家9例の中には、ザシキ裏手に縁の代わりに先述した「ショイン」が附属しているものがある。地区で最古と思われるKi家住宅にはないが、同家住宅に準じて古いK店を筆頭に6例の町家に4畳大のショインが確認できる。しかも、ショインは、明治最末期の事例（N家住宅）に至るまで年代に係らず付設している（表2-1/図6-1参照）。

ショインの間を有する町家は両津地区に加え、相川下町においても2件（S商店、天保9年、下戸町、及びW家住宅、大正元年、下戸町）見いだせる。

両津地区のK店と先述した佐渡島における農家住宅を代表する北条家住宅（図5-3参照）の平面を比較すると（図6-2）、通り庭を持つ町家型の平面と農家型との違いはあるものの、オエとナンド、ザシキ、ショインによる相互の関係と平面構成は、オエとナンド境上部の神棚の構成を含め基本的に同質である。

ショインを伴うこともある両津型の町家平面は、短冊状の敷地条件に規定された通り土間型の平面構成をとりながらも、島内の農家型平面との類似から農家の平面形式を継承する可能性を感じさせる。実際、島外、例えば新潟県下の町家等を始めこれらの中にこの種の平面構成は見いだせない。ナンドやオエに当たる部屋は新潟県下の町家にも存在するが、その構成は異なる（後述）。

7. ナンドを持たない町家

相川上町の町家にはショインはないし、そもそもナンドが見いだせない。相川上町におけるナンドを持たない町家平面は同地区を中心に見いだせるので、仮に「相川上町型」と呼ぶとすれば、オエ上部が土間と一体に吹き抜けるという室内構成の違いを除けば、相川上町型は実は「京町家」に代表される通り土間型の町家とその平面構成において変わらない。

年代が下るに伴い居室裏手の部屋に床の間等の座敷飾りが備わりザシキが確立すると、なおのこと京町家における今日見る標準的な町家平面の型との類似性は高まる。19世紀末期（明治末期）と推察される上町地区のTg家住宅（上京町）に見るような、居室を二列に配列する平面構成においても、その点は変わらない。



図6-2 K店（両津湊）
復原平面図



図6-1 両津湊における町家平面形式分布図

既述の通り上町地区は鉾山町としての歴史的背景をもち、近世以来島外からの移住や島外との交流が活発で、関西地域との密接な関係も明らかにされている¹⁶⁾。ただし、残念ながら建築や住宅に関わる文化的交流や繋がりを示す資料は現時点ではない。

しかし、ナンドを持たない相川上町型の平面構成は、佐渡島が日本海を挟んで対面する中越・下越地方（新潟県）における町家形式とも異なる（後述）。その平面や構造の類似性は、上越地方以南、すなわち北陸、近畿、さらには西日本における町家形式にむしろ求めることができ、筆者が「京都型町家」と位置づける町家形式がこれに対応する¹⁷⁾。

京都型町家の遡源は京町家である。ゆえに、相川上町型の町家と京町家との類似性の指摘は京都型町家との類似性でもある。相川上町型町家と「京都」を冠する町家類型との関係性は、相川上町型町家が外来の町家形式であることを強く示唆する。

京都の町家はナンドを持たない。この点は、伊藤毅が「農家に一般的に備わっている「ナンド」という専用の就寝空間を欠いている」と、農家と比較しつつ町家建築の源流である京町家の特異性を指摘している¹⁸⁾。京都型町家は、主としてその構造形式に着目した類型であるが、近畿地方から西日本に広く分布する京都型町家にはナンドを持たない平面形式が一般的である。

したがって、相川上町型の町家は、農家との関係が希薄な町家形式である、という指摘も成り立つ。

8. 二階ザシキの特異性

幕末に建てられた相川上町型町家である To 家住宅¹⁹⁾（元治元年、棟札、大工町）は二階ザシキを有するが、二階ザシキは裏手に配置されているという点が注意される（図 3-8 参照）。

S 家住宅（明治 17 年、棟札、三町目）は相川下町の町家であるが、ナンドを持たない相川上町型の町家で、しかも二階が発達している（図 3-1/ 写真 4-3 参照）。総二階建ての階高をもつが、二階ザシキは裏手に配置され、To 家住宅と二階の構成において同質である。

これに対して、文化 6 年（1809、普請帳）の O 家住宅（図 3-10 参照）に代表される両津地区の二階建て町家²⁰⁾を始め、相川下町における二階ザシキを持つ比較的早い事例である H 家住宅（19C 中～後期、小六町、図 3-7 参照）、あるいは沢根地区の S 屋（昭和 15 年大火以後の再建、図 5-7/ 写真 5-5/6 参照）などでは、表側に二階ザシキが設けられる。両津型町家における二階ザシキはまず表側に設けられるのである。

それゆえ、相川上町型町家における二階ザシキの配置は、相川上町型町家にナンドがないという事実と同様に特異である。相川上町型町家における二階ザシキの配置

についても、あえて言えば京町家のそれとよく似ている。表通りに面して立ちの低いツシ二階建ての形式を踏襲する京都の伝統の中で、京町家の二階ザシキは裏手二階において展開する²¹⁾。

むろん、京町家と相川上町型町家とのこの類似にどれほどの意味があるのかはわからないし、これをもって京町家との関係性を議論する事も出来ない。しかし、相川上町型の町家が二階形成においても特異であるという指摘は、その外来性を示唆する理由として意味があろう。

9. 赤泊地区の町家形式

赤泊地区は佐渡島の南東の海岸線に位置し、越後の寺泊港とは佐渡と本州を最短距離で結び、宝暦元年（1751）以降、佐渡産物資の他国出しの許可も得て港町として発展し、漁業、廻船業さらには松前稼ぎでも栄えた²²⁾。

赤泊地区は、平入町家を主体とする島内にあって妻入家屋が目立つ町並みとして以前から注目されていた²³⁾。同地区では明治 7 年（1874）に大火があり、大半はそれ以降の再建家屋であるが、予備調査の過程で 1 例だけ大火を免れた家屋（S 家住宅、妻入）を見いだしたので、同家住宅をはじめ古い遺構を中心に 8 件の町家（妻入 7 件、平入 1 件）を調べた。

赤泊地区の町家の平面は、チャノマを中心とする。相川地区を始めこれまで取り上げて来た町家におけるオエ・オウエを赤泊ではチャノマと呼ぶ。いずれもナンドを持つ点で共通するが、チャノマとナンドの位置関係には 2 系統あることが予想された。

まず、チャノマの上手にナンドを配する家屋である。このタイプは平入家屋である Y 家住宅（明治 13 年、図 9-1）を始め 4 例見いだせた。これらはこれまで述べてきた両津型町家と同種の平面構成と見なしてよい。

他の 4 例はいずれもチャノマの裏手にナンドを持つ家屋で、典型事例は明治 7 年大火以前に遡る S 家住宅である²⁴⁾（図 9-2）。この平面は、これまで本論で取り上げて来た他地区の町家では見られない新手の形式である。

S 家住宅では、他にもチャノマの上手壁面は当初床の間、仏壇、押入に 3 分割されていたことがわかり、またチャノマ下手の通り土間上部には渡り廊下が設けられ、階段が当初から設置されている点も注目された。

S 家住宅の間口幅は約 3 間半と同地区の調査家屋中最も狭い。しかし、チャノマの裏手にナンドを配置する S 家住宅の平面構成が間口幅の制限によるものではないことは、規模の大きな妻入家屋においてもこのタイプが主流であることからわかる。

A 屋（明治 11 年、図 9-3）は大型ゆえに居室列を 2 列とし、「ナカス」と呼ばれる中庭を妻入主屋に欠き込むように設けているが、チャノマの裏手にナンドを設ける点で S 家住宅と共通するのである。

相川や両津地区等では見かけないこの種の平面構成を、以下「赤泊型」と仮称する。赤泊型平面は、赤泊地区の関連調査として実施した小木地区でも採取された。

小木地区は、赤泊とともに近世佐渡金銀山の外港として対岸の出雲崎とを結ぶ港町として栄えた。M 酒店は、天保 2 年 (1831) の新地開発に伴い建てられた町家で (当家所蔵文書から)、明治 37 年、町の主要部が焼失した大火の際にも被災を免れて、小木地区で恐らく最古の町家と考えられる。その室内構成は、ナンドをオイエの裏手に配置するもので、赤泊型である。

赤泊や小木がともに近世以来佐渡の重要な外港として、対岸の寺泊や出雲崎との密接な交流史があったことを踏まえれば、赤泊型町家については、寺泊や出雲崎地区の町家形式との関係を確認しておく必要がある。

出雲崎地区は狭小間口の妻入家屋が櫛比する家並がよく知られ調査報告もあるし²⁵⁾、寺泊の町家も妻入で数例の報告がある²⁶⁾。筆者らも出雲崎・寺泊両地区について実地に関連調査を行い、平面を復原した (図 9-4)。

出雲崎と寺泊の町家平面は、ともにチャノマの裏手にナンドを配置する点で共通し、チャノマの上手はその多くが壁面を 3 つに分割して床の間、棚、仏壇などとし、その上部に神棚をしつらえる²⁷⁾。

出雲崎や寺泊の町家は妻入で、その平面構成は赤泊型町家と同類で、しかもチャノマ上手の 3 分割型の装置配置やオイエ上部に渡された廊下等の構成は、赤泊地区の S 家住宅とよく共通する。

出雲崎や寺泊における町家形式は、さらに新潟市域における既往の町家調査の成果²⁸⁾と照らし合わせてもよく類似する。筆者らによる小須戸地区 (新潟市秋葉区小須戸) における町家調査においても、採取した町家の平面構成は、チャノマの裏手にナンド (ネマ) を配する赤泊型町家と同類で、チャノマ上手の 3 分割型の装置、あるいは通り土間上部の渡り廊下、など多くの共通点がある (図 9-5)。赤泊型町家は越後の町家、具体的には中

越および下越地方における町家形式との明確な共通点を指摘することができるのである。

赤泊の、明治 7 年の大火以前に溯る数少ない遺構である S 家住宅は妻入であった。大火後いち早く再建されたいわゆる「五人間屋」²⁹⁾と呼ばれる同地区における有力階層の大型町家 (「N 屋」「A 屋」など) も妻入である (表 2-1 参照)。赤泊地区内の現状は平入家屋が数では優勢であるが、妻入家屋の方が古く、町は妻入町家を基軸に形成されたものと想像される。

妻入家屋は島内では珍しく、赤泊型の町家形式も赤泊や小木等に限られる。しかも中越・下越地方の妻入町家と似るとなると、赤泊型の町家は、新潟本土の町家形式が佐渡に持ち込まれることで成立した可能性が高まる。

家屋の間取りは生活様式や文化の投影だとすれば、赤泊型町家の日本海を挟む町家構成との類似性 (「チャノマ」の呼称も含めて) は、中越・下越地方の生活様式や建築文化の佐渡への移入を示唆する。

10. むすび

相川上町型は外来型の町家だと先に述べ、赤泊型の町家も外来型であろうと指摘した。相川上町型は、近世初頭、相川上町の鉾山町の形成に伴い成立し、赤泊型は江戸時代の後半以降、対岸の中越・下越方面との航路の発展とともに到来したものと推察した。

しかし、相川上町型と赤泊型とはナンドの有無で間取りの意味を大きく異にする。中越・下越方面の町家にもナンド・ネマがある。したがって、ナンドを欠く相川上町型は、近場から持ち込まれたとは考えにくい。

島外からの家屋形式の伝搬や影響の実態を捕え、外来性を実証することは近距離であっても容易ではないが、相川上町型の存在は、京都型町家など京都起源の町家形

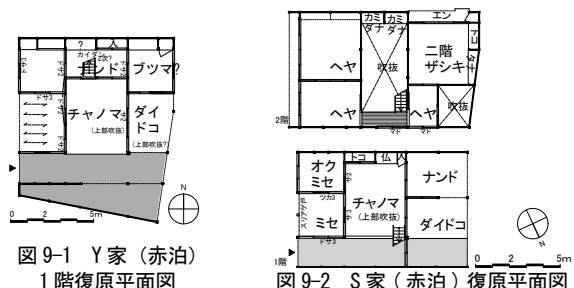


図 9-1 Y 家 (赤泊)
1 階復原平面図

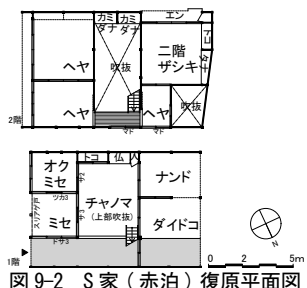


図 9-2 S 家 (赤泊) 復原平面図

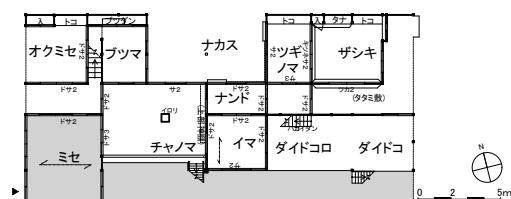


図 9-3 A 屋 (赤泊) 1 階復原平面図

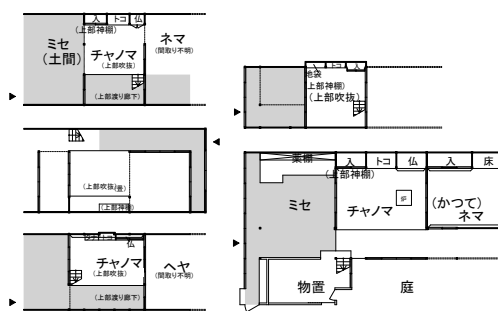


図 9-4 越後の町家平面図 (左列: 寺泊, 右列: 出雲崎)

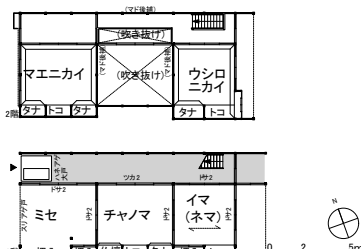


図 9-5 M 家住宅復原平面図 (新潟市小須戸)

式との関係を想定することで、初めて理解できる。

赤泊型がローカルな近距離型の外来形式であるのに対し、相川上町型は関西までも視野に入れたより広域にわたる建築文化の伝搬過程の所産だと考えたい。

相川上町型はその伝搬の飛距離において、まさに京都型町家だといえよう。筆者（大場）は、北は盛岡から南は福岡さらには長崎辺りにまで広域にわたり京都型町家の存在を指摘した³⁰⁾。日本の町家の中から京都型町家を析出することで、農家とは異なり、町家はローカリティのみでは理解できない事を示した。近世町家のユニバーサリティは京都型町家に由来するのである。

相川上町型と赤泊型町家の発見は、日本列島における町家形成とその伝搬の歴史の中に佐渡町家も意義づけられることを示した。相川上町型は、近世初頭、島外からの流入者により人為的に形成された鉾山町という特殊な都市空間の中で成立した。ゆえに、相川上町型は京都型町家の好個の事例と意義づけられてよい。

佐渡の町家は、京都型町家（相川上町型）、近在からの外来型町家（赤泊型）、農家由来の在来型町家（両津型）の三類型で構成される。日本各地の町家形成もこれらのいずれかに類型されるはずである。その意味で、佐渡の町家は日本の町家形成の縮図、だと言っても大過ない。

<注>

- 1) 相川町史編纂委員会：佐渡相川の歴史 資料集 8, 新潟県佐渡郡相川町, 1986. 2.20
- 2) 大庭裕雄 岡崎篤行：鉾山町相川における歴史的建造物の残存状況及び外観特性（計画系）、日本建築学会北陸支部研究報告書 16（33）, pp693-696, 2010.7.27
- 3) 新潟大学：佐渡相川・笹川の歴史的環境と歴史的建造物, 新潟大学 工学部建設学科 都市計画研究室 / 新潟大学 人文学部 地理学研究室, 2009.7
- 4) 西村伸也ら：列構成と開口幅から見た平面構成とその住まい方 - 佐渡市両津の町家における室空間構成に関する研究 - その 1-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, p.285, 2005.9 / 西村ら：天井高・ザシキの壁と空間領域形成の仕組み - 佐渡市両津の町家における室空間構成に関する研究その 2-, 同梗概集, p.287, 2005.9
- 5) 新潟県佐渡郡小木町：宿根木 伝統的建造物群保存対策調査報告書, 新潟県佐渡郡小木町, 1981.3
- 6) 坂井誠一 土屋敦夫：歴史的都市の地図上への復元に関する研究：事例研究・佐渡相川町, 上越教育大学研究紀要 4, pp.327-346, 1985.3
- 7) 新潟県佐渡郡相川町教育委員会：金山の町佐渡相川 伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書, 1993.3.31
- 8) 松尾康弘・大場修：佐渡相川・上町の町並みと町家の構成と特徴, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 54 号, pp.549 ~ 552, 2011.7 / 松尾・大場：佐渡・両津湊の町家の特徴と変遷, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.511 ~ 512, 2011.8
- 9) 現地家屋実測調査は、現状図（平面図（一・二階）、断面図、配置図、立面図等）の採取に加えて、主屋平面については、その一・二階について、建築当初の状況を明らかにするために改造状況の把握、改造による痕跡の採取により復原平面図の作成につとめた。あわせて建築年代についても部材の経年状況や家屋形式等から総合的に判断した。屋根改造や二階の増築等の変更がある場合は、復原断面図を作成した。このようにして採取した復原平面図、あるいは復原断面図に依拠しつつ建

築史的検討を進めた。

- 10) 大場修：近世近代町家建築史論, 中央公論美術出版社, 2004.12
- 11) 嘉永 5 年 (1852) 以来, 文久 4 年 (1864), 元治 2 年 (1865), 慶応 2 年 (1866) の祈祷札が確認できた。
- 12) 相川郷土資料館所蔵：家屋台帳, 昭和 4 年調整
- 13) To 家住宅については、『図説佐渡金山』（テム研究所 1985）から引用。
- 14) 前掲, 松尾康弘・大場修：佐渡相川・上町の町並みと町家の構成と特徴, 2011.7 / 松尾・大場：佐渡・両津湊の町家の特徴と変遷, 2011.8
- 15) 高山恵梨子, 岡崎篤行, 港町両津における歴史的建造物の残存状況および外観特性 - 湊と夷の町屋を中心とした町並みを対象として -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2010, 731-732, 2010.7 / 西村伸也他, 列構成と開口幅からみた平面構成とその住まい方：佐渡市両津の町家における室空間構成に関する研究 その 1, 日本建築学会学術講演梗概集 E-2, pp.285-286, 2005.7 / 西村伸也他, 天井高・ザシキの壁と空間領域形成の仕組み：佐渡市両津の町家における室空間構成に関する研究 その 2, 日本建築学会学術講演梗概集 E-2, pp.287-288, 2005.7
- 16) 相川町史編纂委員会：佐渡相川の歴史 資料集 7, 新潟県佐渡郡相川町, 1978.10.25
- 17) 前掲, 大場修：近世近代町家建築史論, 2004.12
- 18) 伊藤毅：町屋と町並み, pp.33, 山川出版社, 2007.7
- 19) T 家住宅については、『図説佐渡金山』（テム研究所 1985）から引用。
- 20) 前掲, 松尾・大場：佐渡・両津湊の町家の特徴と変遷
- 21) 京都府教育委員会：京都府の民家, 第六冊, 1971, 日向進：近世京都の町・町家・町家大工, pp.28 ~ 30, 思文閣出版, 1998.11
- 22) 赤泊村史編纂委員会：赤泊村史, 上巻 p.1 / 下巻 pp.224-241, 1982.3
- 23) 鈴木秀実 岡崎篤行：港町赤泊における歴史的建造物の残存状況及び外観特性 - 堅屋と横屋の町屋の混在した町並みを対象として -, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.305-306, 2011.7
- 24) 赤泊地区の S 家住宅は、調査後 1 年を待たずに火災に遭い、その後撤去された。
- 25) 観光資源保護財団：『荒海や佐渡によこたふ天河』 - 天領出雲崎の歴史的遺産 -, 石橋総合印刷, 1991.3.15
- 26) 樋口雅希ら：寺泊の町家における地域特性に関する研究 - チャノマの特徴からみる室空間構成の仕組み - 日本建築学会北陸支部研究報告集 51, pp.305-308, 2008.7 / 渡辺郁ら：チャノマの特徴から見る新潟県内の妻入り町家 - 寺泊の町家における地域特性に関する研究 その 1-, 日本建築学会学術講演梗概集 E-2, pp.299-300, 2008.7.20 / 半澤祐介ら：チャノマの特徴からみる室空間構成の仕組み - 寺泊の町家における地域特性に関する研究 その 2-, 日本建築学会学術講演梗概集 E-2, pp.301-302, 2008.7.20
- 27) I 氏（新潟県三島郡出雲崎羽黒町）所蔵図面（関連研究）横山大樹 西村伸也ほか：出雲崎の町家の空間構成と住まい方に関する研究 住戸ウラにあるダシダナの使い方と住戸ウラの特徴的な住まい方について, 日本建築学会北陸支部研究報告集 (54), pp.359-362, 2011.07.10
- 28) 西村伸也ら：新潟の町家における空間構成の特徴とそのしくみ - 高田・白根・栃尾の「ヒアワイ」「ダシアイ」「クイワセ」の使われ方と共用のしくみ -, 日本建築学会計画系論文集 (467), pp.71-79, 1995.1.30 / 木戸秀一ら：新潟県白根市の町家における空間構成の変容に関する研究 - 町家の変容とそれを支える住まい方について その 2-, 日本建築学会学術梗概集 E-2, pp.77-78, 2003.7.30 / 杉山幸子ら：新潟県白根市の町家における空間構成の変容に関する研究 - 町家の変容とそれを支える住まい方について その 2-, 日本建築学会学術梗概集 E-2, pp.79-80, 2003.7.30
- 29) 前掲, 赤泊村史編纂委員会：赤泊村史, 上巻, pp.156-158
- 30) 前掲, 大場修：近世近代町家建築史論, 2004.12